

入 選

おばあちゃん家の犬

二年 石田 一頼

ぼくが生まれたとき、おばあちゃん家に犬がいた。ちゃ色いミニチュアダックスフンドの、名前は「ちっぷ」。ちっぷは、ぼくのとおりでおひるねしたり、ぼくにはいいいをおしえてくれたりもした。ぼくが大きくなると、一しよにおにごっこもした。一しよにおさんぽにでかけた。おばあちゃん家にあそびに行くと、いつもしっぽをふってぼくのところに来てくれた。ぼくのせかいには、ちっぷがいるのがあたり前だった。ぼくは、ちっぷが大すきだった。

ちっぷはだんだん、はしれなくなった。あんまり「ワンワン」と、ほえなくなったし、目が見にくくなってるみたいだった。おいしゃさんは、「おじいちゃんになったんだよ。」と言った。ちっぷは、十九さいだった。人げんでいうと、九二さいと言っていた。ぼくはびっくりした。犬はなんで、こんなに早くとしをとるんだろうと思った。おばあちゃんは「もうすぐおわかれかもしれないね。」と言った。ぼくは、とてもさみしくなった。おかあさんと話して、いつも「大すき」という気もちをつたえることにした。「ちっぷ」とよんで、たくさんあたまをなでた。

ちっぷは、二十さいになった。つぎの日、ちっぷはお空にいった。ぼくは、いっぱい泣いた。さみしくてたまらなかった。

もうすぐ、ちっぷがお空に行つて、一年。今も、くらくらすると空を見上げて一ばんぼしをさがす。一ばんキラキラ光るほしを見つけると、うれしくなる。ちっぷはいつも、見まもってくれている。